



沖

俳句雑誌[おき]

10月号

沖 発行所

展 帆

能村 研三

募金・チャリティ

東日本大震災から半年たったがまだに多くの人達が避難生活を余儀なくされ、さらには福島原発問題でも多くの人達が故郷を離れた不自由な生活を強いられている。これまでに、私たちも様々な場面で、募金やチャリティに参加してきた。しかし、それが素早く被災地の方々に届いていると思いきや、国や赤十字の対応のまづさから適切に届いていないというから困ったものである。

遺愛なる紙燐寸もて門火焚く
手書き稿執する人の涼しかり
読み比ぶ新聞社説朝ぐもり

空蟬の縋るかたちにいのち見ゆ
私が今年担当することになった、千葉県俳句作家協会の「千葉県俳句大会」も「東日本大震災チャリティ」

夏負けや野^{のづかさ}阜^{かさ}までは登り来て

爽籟や西暦換算素早かり

処暑の風手抜かりの無き朝仕事

旅にみて治癒力増やす今日は処暑

一列に鬨の声あぐ曼珠沙華

展帆を魚眼で捉ふいわしぐも

と銘打って募集したところ、通年をはるかに超える応募があった。うれしいことである。

俳人協会でも、このための委員会が作られ、俳人協会としての独自の募金活動を開始、さらには主宰クラスによる色紙短冊頒布会の売り上げを寄付することを決定した。

私の勤める文化振興財団では、作家の井上ひさしさんの関係から、「吉里吉里人」や「ひよっこりひよたん島」の舞台となった岩手県の大槌町を支援しようと「吉里吉里募金」を立ち上げ、七、八月に八回のチャリティコンサートを実施し、この募金は大槌町の学校の楽器の購入に役立てていただくことになっている。

いづれにせよ、この募金活動も一過性で終わらせることなく、息長く継続していかねばならないことと思っている。

被災された方々が一日も早く日常を取戻し、俳句や様々な文化に触れられる機会が多くなることを願っている。

蒼茫集



秋草の風

吉田陽代

炎天の横断ひとり遅れまじ
試さるる如き猛暑を生きむとす
揚羽蝶風の継ぎ目より現るる
獅子頭飾り内輪の夏まつり
鳳凰の初穂くはへし神輿かな
クーラーでなき秋草の風に逢ふ

膝

辻直美

門火焚くひとりの膝を深く折り
思ひ出はみな色を持ちかき氷
雲の峰夫ありし日の谷間より
南部風鈴釘錆びてやや老いて
横長の記念切手や大暑来る
庭先の向日葵のほか誰も居ぬ

竜頭

細川洋子

尖塔は見上ぐるばかり敗戦日
師の登田先生声の朗読聞くや螢草
滴りや詩の推敲に果てのなく
星月夜生けるものみな脈打てり
朝曇竜頭のかたき腕時計
書棚より画集引き出す夜の秋

遠き日

宮内とし子

山も又生くる鼓動に滴れり
夏ぐみにけもの道なること忘る
夕焼のやがて一人の暮色なる
水蜜桃すすり細胞若がへる
一戸失せ三戸建ちたる晩夏光
たぶの木に遠き日のあり終戦日

晴 男 酒本八重

落し文二つ三つなら読みませう
陽を払ふやうに日傘をたたみけり
晴男いづこへ失せし雨神輿
箱庭の子規の糸瓜も水欲しき
霍乱に効くとふ富山の毒消や
棹さすは手練れ船頭雲の峰

塔の町 吉田政江

蓮見舟風へ水悼を持ち替へる
水嵩に息つぎのごと蓮蕾
花数の方へ傾ぎて蓮見舟
頤押上略行を秋暑に晒す塔の町
「鬼平」の細筆の碑や涼新た
盆東風や南北墓所の明るすぎ

白 昼 辻美奈子

こゑひそめけり二〇一一年の蟬
そつとしといて白昼のすべりひゆ

向日葵の色をぐらりと生けなほす
林間学校そつけなく戻りけり
夏掛を子らへ投網のごと拡ぐ
水中花東京ガールズコレクション

書 淫 千田百里

海の日の国旗冷ましてより畳む
珊瑚樹の実房の重し終戦日
羽蟻の夜書淫の夫を斜に見て
首すぢの辺りに夏の居据れる
鬼平押上略行二句が飛んで来るやも灼くる寺
腰据ゑて秋暑の国を統ぶる塔

炎天を漕ぐ 望月晴美

炎天を漕ぐやからすの羽根ぢから
炎帝に選ばれしごと義姉逝けり
炎天押上略行や地に生きし義姉地に還す
月下美人ひらく力を闇が押す
新涼を待つは良き友待つに似て
鳩亭に萩の風韻ありにけり

夏終る 遠藤真砂明

炎天へ翔つ絶壁の蒼鷹
炎帝を讃へて若きらと酌めり
つっぱつて生きる一念兜虫
海亀のおのれひきずる砂の跡
もう誰もみない糶場の貝風鈴
波の穂は死者のてのひら夏終る

書込み 荒井千佐代

梅雨曇り赤き羅紗垂れ火事兜
朝よりの灘のべた風梅を干す
蛭路地に豆煮る匂ひ紅芙蓉
書込みの多き楽譜を曝したる
星まつり鍵盤白く拭き上げて
紛れなく川床の湿りの鼻緒かな

笹の葉コップ 久染康子

こころにも痛点のあり霊迎
盆帰省裏木戸いまも心張り棒

喉ぶくろ夕日に透ける羽抜鷄
笹の葉の円錐コップ清水汲む
上空の技師炎帝に見えしか
塔灼くる嘗て戦火の焼け土に

歓声 田所節子

わが腕に涼しき命駆けてくる
驚かす楽しさ覚え水鉄砲
噴水の穂先に夕日残りをり
歓声の器や夏の甲子園
炎天の奥を起重機さぐりをり
滝しぶき空が微塵にくだかれて

蹴る石もなき 成宮紀代子

炎昼の蹴る石もなき丸の内
濛々と噴き湯霧ごめ後生掛
夕霧の深く熊除け高鳴らす
今朝小熊見かけしと言ふ茂みかな
蝮酒ぴたりとこちら向きぬたる
盆用意まづ踏台にのりもして

魂のただよひ 藤原照子

湿原の熊の踏み跡朝ぐもり
昼寝覚かの世この世の入り混り
萱草を咲かせて山家めけるかな
早場米要検査てふ試し刈り
敗戦忌少女に八十路近づき来
新盆の魂のただよひ太平洋

うしろ姿 楠原幹子

二歳児のジャンプ二センチ雲の峰
八月六日赤き半月低くあり
引き際はかくありたしや夏椿
炎天へ脚立伸ばして誰もぬす
舞台あいさつ最後はサングラスかけず
向日葵やうしろ姿の隙だらけ

六三四振り 千田敬

夏逝くと浮雲嶺々をわたりゆく
汗ばみて蝦夷の強情なくもなし

歳とるもたのしみ秋の昼寝かな
秋光の真芯となりて六三四振り
邂逅の予感も秋の更衣
秋の雷去りてふたりの咀嚼音

原爆忌 鈴木良戈

花海桐小さき漁船の力走す
診察へ被爆手帳を原爆忌
医家三代伝へられたる梅酒の香
木場堀にあふるる光夏柳
旅果ての夕焼雲の葡萄色
揚花火残像しばし闇の上

夜 蟬 大畑善昭

夜蟬鳴く庭に天突く一樹あり
銀竜草ここらは魑魅の踊りの場
新涼の楛鋏んでゐるひびき
子子の雀躍を天よしとせり
黒焦げも見す落雷を受けたる木
夜はすでに虫の海なり寧く寝む

潮鳴集



黙の時

甲州千草

塔はまだ黙の時なり灼くるなり
スカイツリーも氏子となりぬ夏の天
三尺寢足場の陰をたつぷりと
少年にサドルを上げる夏休
アナログの機器の行方や銀河濃し

会議室

諸岡和子

日曜は早起き隣の芝刈機
節電に星の近づく庭涼み
香水の戦つてゐる会議室
炎天は喝采に似て俳優碑
押上春慶寺
有りやうに生きて悔いなし花木槿

青き海

藤原はる美

ビー玉に青き海透く沖繩忌
梅雨晴れて湖は静かに銀の器に
時の日の海に向けたる午後の椅子
ゆつくりと夕焼ひろがる老後かな
足裏刺す熱き砂浜敗戦日

あめ色の風

富川明子

空蟬にあめ色の風詰まりぬる
海ほほづき夫に素直になれぬ日の
甚平や笑へぬ話してゐたり
笑顔しか思ひ出せない魂迎
鉾回す敷竹に水待つたなし

沖作品



能村研三選

夏座敷に入るやいきなり光る海

市川市

七田 文子

冷蔵庫の間取り考へ西瓜買ふ

自由てふ不自由のあり水中花

思ひ出のふつふつと湧きソーダ水

今朝からの頭空つぽ浮いて来い

炎天のソーラーパネル畏まる

直線を涼しく配し美術館

峰雲や野外彫刻動きさう

桃を食ふ甲斐を丸ごといただきぬ

待ち合はす母の手縫ひの藍浴衣

今年竹少女剣士の白袴

六月の雨に送られ嫁ぎけり

若竹や風あるときは逆らはず

大梁の黴は宝と杜氏かな

コーラスのやうに口開け燕の子

千葉

清水佑実子

東京

能美昌二郎

蔓の先晩夏の風に縋りをり

市川市

佐野ときは

滴りの澄み切る底にいのちあり

ゆつたりと風の音階黒揚羽

羽抜鳥この世まだまだ面白き

太陽に刻印されて水着の子

おのが影跨いでをりぬ水馬

全山の彩を映して通草熟る

おしげみの声もありなむ蟬時雨

半分は僧に首振る扇風機

妖精の吐息からすうりの花

噴水に疲れの見ゆる時刻かな

くちなはのS字S字に川渡る

虫たちの尻はまんまる釣鐘草

浴衣着て震災のこと父母のこと

弔ひのこころのままに夕端居

埼玉

大石 誠

岩手

浅沼 久男

沖作品 15句選評

*
能村研三

自由てふ不自由のあり水中花 七田 文子

この句、作者はコップの中の水中花を見て思いついたのであるうか。水中花は一見美しく見えるが、実際生物ではなく、人間に一方的に美しさを見せるために存在する。自然に生育する植物であれば、気候や外的な条件によっても生育が左右されるが、この疑似的な水中花には、その自由はない。人間社会においても、自由と不自由は表裏一体であるとも言われている。

炎天のソーラーパネル畏まる 清水佑実子

今年は原発事故のせいもあって、私たちの生活に直接かかわるエネルギーの問題が大きな話題になった。ソーラーパネルも今回の事故の前から一般的に普及していたが、今年は特に一人ひとりに節電の意識が高まった。この句は何と言っても、下五の擬人化の表現として「畏まる」が面白い。こうした非常時で

あれば、ソーラーパネルとしても、炎天下の漲る太陽から心して電気をとるため、畏まりながらも一生懸命働いた。

今年竹少女剣士の白袴 能美昌二郎

この句、中七が「少年剣士」であつたら、やや常套的な句になつてしまふが、「少女剣士」であることが良かった。筆者の三人の娘も少女時代皆剣道をやっていたので、私自身実感がある句として共鳴した。上五の季語の「今年竹」は少女の健やかな成長を暗示させ、下五の「白袴」の清潔感もヒツタリと決まつた。

滴りの澄み切る底にいのちあり 佐野ときは

「滴りの澄み切る底」つまり、湧水がしみ出しているところには、意外にたくさん生物が生活している。一見ただけではわからないこともあるが、水の中の落葉をめぐったり泥底をつついたりすると、モゾモゾと、あるいはすばやく身をかくす生物がいる。これを底生動物というそうだが、トンボや螢などの虫もこれにあたる。

妖精の吐息かからすうりの花 大石 誠

からすうりは、夏の夜に花卉の縁が糸状に長く伸びる花を咲かせる。複雑な花卉は、蕾の時にはきれいに折りたたまれていたが、その後一糸乱れずに展開し、完全に開ききり、翌朝にはしおれてしまう一日花である。白い花は月の光の下でよく目立ち、まるで妖精の吐息のようである。

(以下略)